

# お足



私のお寺には、他の神社佛閣に設置してある、所謂「賽銭箱」が一つもない。その代わりに下の写真の「ネコ」と「顔なし」たち(どちらも貯金箱)がその役目を立派に務めている。そうしてから10年以上たつ。ネコが「ニャー」と鳴いてお賽銭をみかん箱の中へ取り込む。顔なしは映画のシーンのメロディーを奏でつつ盃を呑み干しお賽銭が口の中へ入っていく仕組み(どちらも Amazon で購入)。可愛く



てその場で何度もお賽銭を入れてくださる方が多い。子供ではなく大人たちだ。これにしてから本堂に忍び込む賽銭泥棒もいなくなった。しかし、そのために設置したのではない。お賽銭を喜捨していきなり拝んだり、お願い事をするのではなく、そこに一瞬の心和やかな「間」が欲しいからである。今回はそれを解説してみたい。

夜中に目を覚ましトイレに行くと、「ざわざわ」と音、声がある。目を向けると、お賽銭を回収した容器から聞こえる。お賽銭の硬貨たちが「早く外に出せ！外に出せ！」と訴えている。まるでスタートの号砲を待つマラソンランナーたちのように。

夜中に目を覚ましトイレに行くと、「ざわざわ」と音、声がある。目を向けると、お賽銭を回収した容器から聞こえる。お賽銭の硬貨たちが「早く外に出せ！外に出せ！」と訴えている。まるでスタートの号砲を待つマラソンランナーたちのように。

江戸時代、人々は「お金」のことを「お足」と呼んだ。買い物等で代金をお支払いするとお金たちは

たちまち世間へ出て行き走り回り、良縁も悪縁も拾ってまた帰って来るという、日本人独特の考え方を持っていた。佛教の「輪廻」に通じる「情けは人のためならず」をお金に対しても当てはめていたと言える。懐にあるお金に対して授かったことに感謝し、お札の向きを整え、小銭も出来るだけ整えて、受け取る人の目を見て丁寧にお支払いすれば、お金たちは世間を走り回り、「良縁」だけを拾って再びその人のお家へ戻って来るのだ。それも2倍ではなく、控えめに 1.2 倍に増えて戻って来る。その積み重ねで「家」が栄える。逆にギャンブルなどで大儲けし豪遊に使ったお金は、同じく世間を走り回るのだが悪縁ばかり拾って懐に帰ってくる。私の知っている社長さんは、毎月の大事なお支払いには、ザルに一万円札を引きその上に五百円玉を置き弁財天様へ行き、そこから出ているお水で洗い清め、乾かして、そのお札を支払金の中に忍ばせて渡している。また、銭形平次研究家 S 丸氏によれば、親分が犯人確保に投げた一文銭を捕物終了後に子分の八五郎が回収し、丁寧に水で洗い清め白木の三宝に乗せて自宅の神棚に供えている。その丁寧な振る舞いがあるからこそあれだけの高い命中率があると S 丸氏は熱く語っている。再放送で、今度神棚をよく観察して欲しい。

日本は、中国や韓国等に比べてカード支払いの習慣がなかなか進まないという。経済的に非合理的なのは承知している。しかし、憂うことはない。裏返せば、日本がそれだけ秩序が守られた安全な国であるから現金が流通し、普通にお釣りを瞬時に計算できる賢い国民だと言える。「お足」の文化が忘れ去られないよう祈りつつも。